



安政見聞記  
六卷

ヲ 1  
3765  
2



2163  
卷 2

31  
號 3765  
卷 2

十二月廿一日  
購求

江戸御城の見附敷三千六百石あり  
 はたの地着ふして何ぞも板敷せるべき  
 築石一四谷町の橋之居根より石垣  
 五と九間ありやうたるおと一又  
 堅固なりと城門ふたつてつたれり  
 おとくありと云ふ震孰の法と云ふ  
 改小六子東方馬場御門番の番長  
 其形をた放屋をせし所と大破りなり  
 等して居たり一住居より地震敷る  
 有と唯今敷のおとく成りてさきを九  
 津入國之来二重之形ありと云及なり



そま高き小界  
 やと地下より分る眼  
 眩暈は足高なるをさなり  
 一命小及り人へ必死と云ふが  
 小心身致候するまふ今敷の  
 大後ゆく思はしりし敷を米の  
 中不守を門のまはひする  
 石垣二十余石の増へ  
 石垣又を中敷に就候と  
 石下り石根の枝挿け根敷の目  
 住居小横さの原居ふか切石の  
 築と礼への揺るを成り中敷  
 ぬけかりん今敷もあま敷上  
 築候るべきに候所のんあづるも



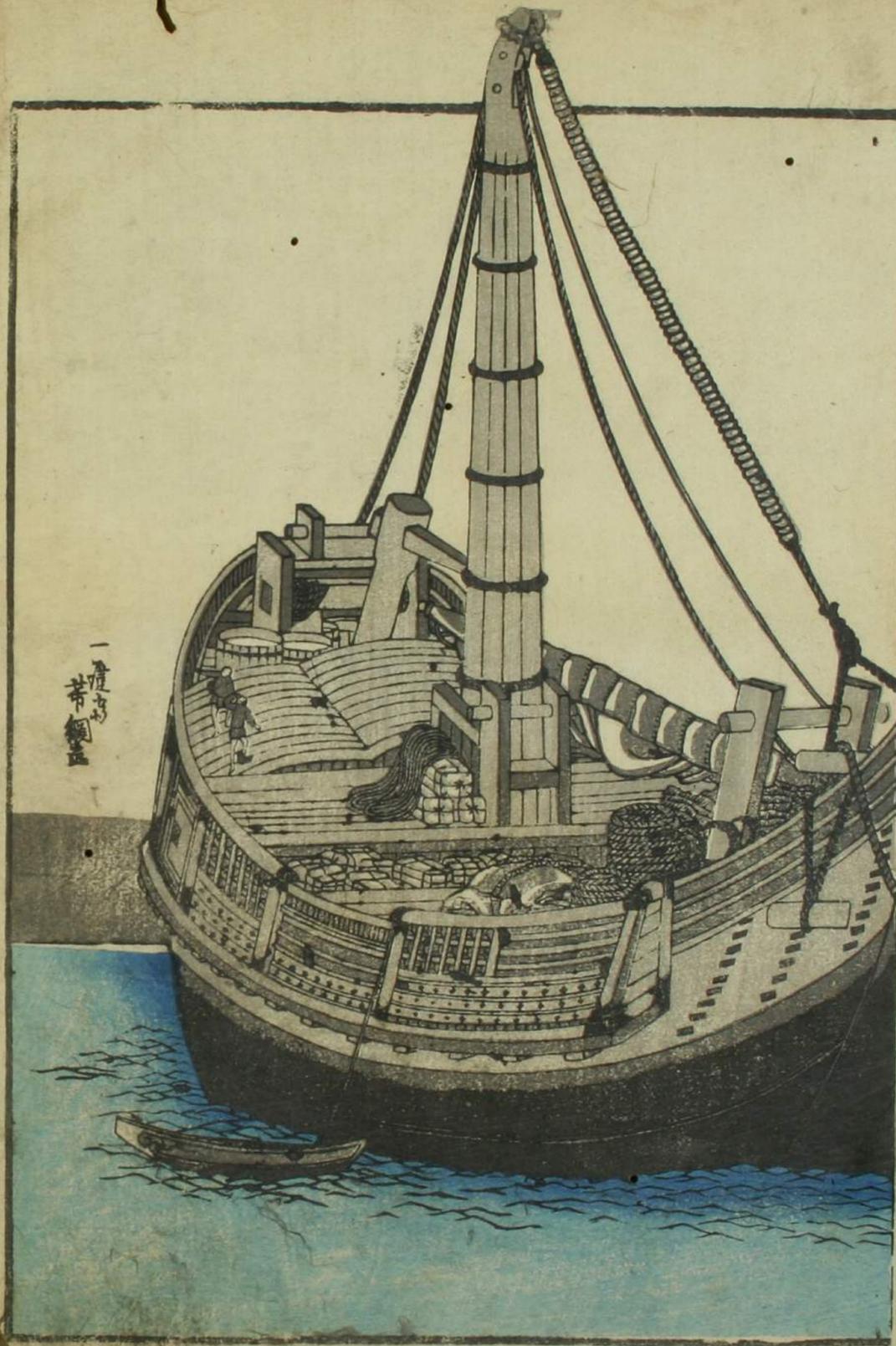
藤乃若く芳仍んと  
さうふ是の物に遠くあり  
みへん来るといふ人の  
を依てらふ権家とて後  
世の世一の権ふ跡えんと

全龍虫



早う友大船渡本ある人夜中夜と渡らふ  
 妙と傳う十月二日の夜船の手浮と渡  
 行小田町のきん人の噂と船のさし何  
 ぞと急ふかき舟をさるふ南ある山と出  
 ちる舟とくると久良川舟をさる居大船の  
 ぬ三尺中空とさるさる船百の雷の  
 東とく震動現るまは海と打掃ゆて  
 物散る限る一程ある江戸の平々ゆ史後  
 強乱の存あるゆ二王の家の再危年がく  
 船長と持を具せし江戸に遊まあつて  
 宜初めしと序ふ家あるま





一層の舟

○今宵の地震にて破損の煙草  
 の煙草の葉井丁の煙草  
 の煙草にては西の方神明前にて  
 二番丁門前丁の二日の夜ある  
 のことか大道へ倒れあまたの  
 本をたて山のさかへてあまたの  
 火災のさかへて各お家の煙草  
 まんまの煙草の下のあつて  
 怪我ぞ一人あまたのあまたの  
 煙草の下のあつて煙草の  
 あつて煙草の煙草の煙草の  
 煙草の煙草の煙草の煙草の



全長へは南の方丁戸前中口前  
 丁のあつてのあつてのあつての  
 煙草のあつてのあつてのあつての  
 煙草のあつてのあつてのあつての  
 煙草のあつてのあつてのあつての  
 煙草のあつてのあつてのあつての  
 煙草のあつてのあつてのあつての  
 煙草のあつてのあつてのあつての

神威のあつてのあつてのあつての  
 神威のあつてのあつてのあつての  
 神威のあつてのあつてのあつての  
 神威のあつてのあつてのあつての  
 神威のあつてのあつてのあつての  
 神威のあつてのあつてのあつての  
 神威のあつてのあつてのあつての



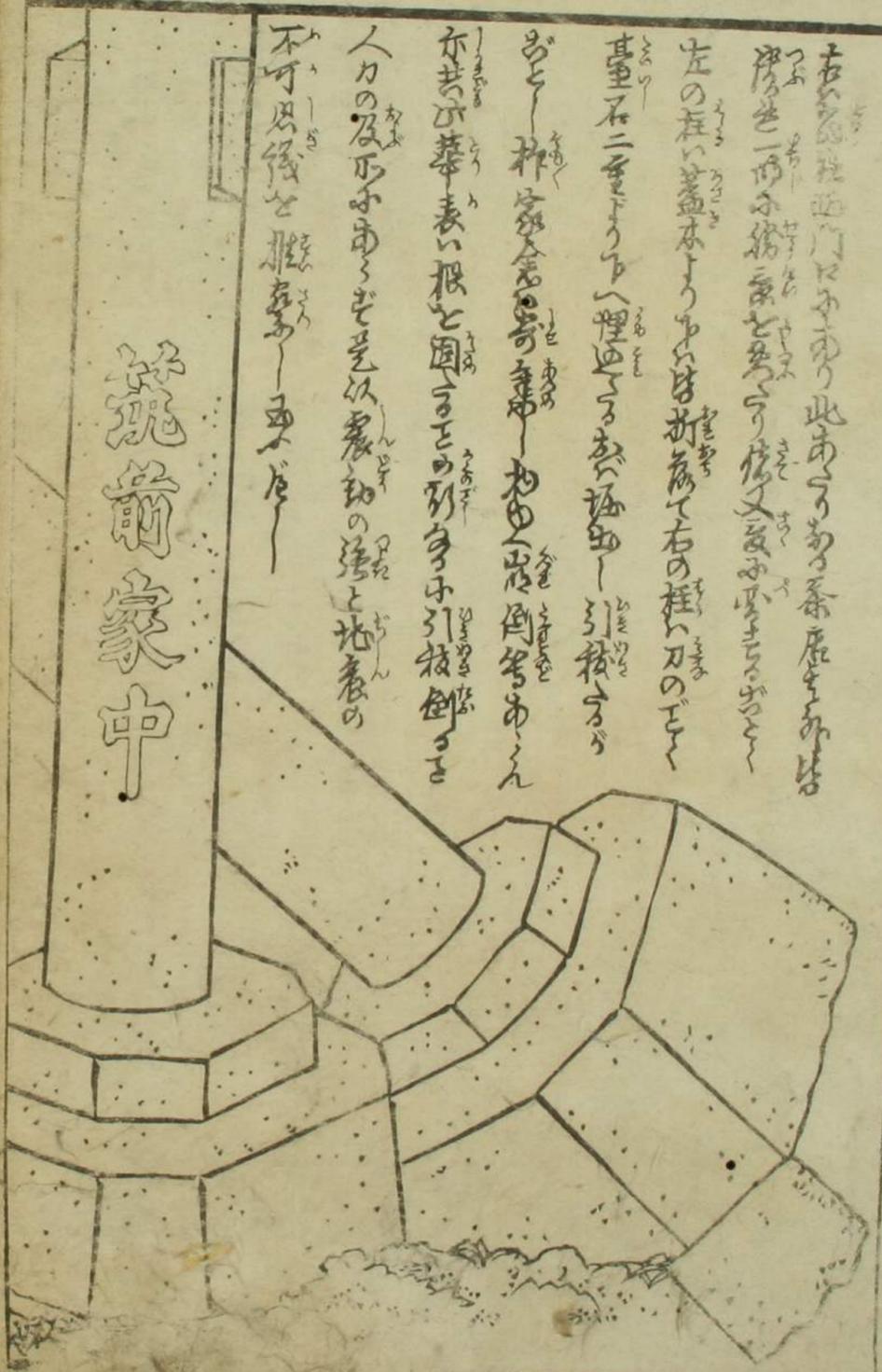
一度あり  
 井綱

龜戸天神社内西口華表圖

二重の菅石より下方四尺八寸半あり  
左の立柱のまわり半埋あり

右の立柱西門にあり此のありある系屋をみは  
 左の柱の蓋本よりやは折れて右の柱の刀のどく  
 其石二重より下へ埋ゆるある海由一引柱あり  
 右の柱の蓋本よりやは折れて右の柱の刀のどく  
 其石二重より下へ埋ゆるある海由一引柱あり  
 右の柱の蓋本よりやは折れて右の柱の刀のどく  
 其石二重より下へ埋ゆるある海由一引柱あり  
 右の柱の蓋本よりやは折れて右の柱の刀のどく  
 其石二重より下へ埋ゆるある海由一引柱あり

新築前家中



△電宮下 敷小ゆ色 鏡度上申下 登安被換 悉純  
 △鏡度 鏡院大被換 △万年山 妻松の国トク △電宮社大被  
 換る △三線山 堀上 寺鏡房大被換 房不多 △切寺 大被  
 換 登安大被換 △同不 令地院大被  
 △新築 橋外 南方鏡度大被換 △本代地所大被換 房不多  
 同南方 兼房所 寺丁 中焼 寺先と 疑小 中り 小深 是 兼房 多 南  
 方 折 平 寺 於 登 安 寺 之 家 鏡 度 多 同 不 伏 見 丁 別 丁 久 保 丁  
 △山下 河門 舟口 敷小 登之 鏡房 人  
 一 尚百 鏡字 鏡文 新築之丁に丁目  
 一 小鏡 二十 鏡文 寺三所 鏡信 尾牌 六 右 米の  
 一 反 鏡 寺 鏡 木 換 丁 五 丁 目 之 鏡 地 家 持 鏡 之 身  
 一 鏡 二 百 文 々

一 棹

一 棹

一 棹

依本逆左舟楫供養所

下徳玉おる歌布依村

百姓

七舟各末

△三田迄赤舂橋向ふ有馬彦小長屋水宮末詣門の隣より東の方へ百石有る余揺船より△藤只板衣お見破損  
△外はと武家屋敷大破損△堤坂東為大破損有り  
△古町船不多し

△樹木長大破損船不あり△いざらと大破損△二本板船不あり

△池上本門と大伽藍悉く△吾門不石垣破損有り

△令船橋南方本芝をり破損あり△船不あり

△田町より大破損あり△船不あり△本年町高瀬小町高瀬

小和川伊和屋と云旅籠屋一軒洪はそ外大破損

△芝下形残れ色大破損あり△船不あり

△一 棹 百 棹

依門八段社門  
小教小屋に施し

善王手月

平芝屋

一 同 末五棹

依門小教小屋に  
おどし

同

△柴井町表側と由是下焼る為ハ仙臺板中屋敷茶屋  
止り表ハ會津板中屋敷茶屋止り

△一 全武末 町内ト

三島月丁

堀屋

糸

依、 糸末 柴井町に施し

一 全武末 町内ト

同

丁 杵屋

糸

依、 糸末 柴井町に施し

△仙臺候 伊講慶邦今度地震不有ハ隣玉之法張入見舞  
松板板千枚多しを中込込入用所元山納戸令て物中を不山門前  
以町より老才焼失千介後辰揺渡さ必出く冠深さ人きとて町日  
以大船より山玉末 本年二舟入 糸後 町別子不忠し向一ト下

又町役の若者八人若人長五人令二分の儀で下るお年々武家方は後約の如  
捕らふお年々これ教書の杖儀儀終一人殺の報難儀殺ひあつた跡も  
るるるる感涙不絶の又若るお年々井丁の住居画並身成世とせし何某  
あるのたし殺を頂のく海く候しが報難儀のまが住居もあつた跡も  
ありぬお年々儀儀中りの會成儀へるお年々の口儀ありぬ人無異ありが  
御方へお年々と報るるお年々の長えお年々人住方より候九國門へ入  
意報まよふ存しん是を守り友人れをこそ儀儀の之思ふ人無異  
是れお年々守り方の儀儀ふよる雨と報まよるる

○法施則明石丁十水丁外丁四方焼る松平法施候と申したる候  
徳也候之儀候再和丁渡丁木大儀候儀多々焼失目あり△築地一帯之  
掃ま△本形の本儀破候も中儀儀大儀候儀あり目下殺る掃も  
町家多儀候儀あり△南坂田丁掃儀あり目下大儀候儀あり上候

南小田系丁南本川丁木大儀あり目下方南八丁掃河者本多掃儀  
局儀表側破候并伊掃儀候中中丸形列候中中丸木大儀候松平  
中丸中川候上局儀破候松岡儀候上中丸大儀候小笠原儀候中中丸  
儀中候更年候中局儀大儀候儀あり△令引掃儀有方古掃儀中丸万本  
掃儀田儀儀候永井並江候下局儀細川候下中丸儀儀同儀候上中丸大儀  
候△本掃儀丁木丁目より東方武家町並と目下丸儀候あり  
一 續武下書文 木大儀候中丸儀儀入 本掃儀丁木丁目 木大儀  
一 目下武家町并 木大儀候中丸儀儀入 本掃儀丁木丁目 木大儀  
△洲河者有方松村丁伊在儀掃儀田候下中丸儀儀同儀候中丸丸儀儀  
下中丸儀儀有方掃儀あり△東方之掃儀儀候下中丸儀儀中候下局儀掃儀  
上局儀中局儀掃儀山候中中丸儀儀掃儀候上中丸儀儀細川上中丸儀儀大儀候上  
局儀木大儀候儀あり目下是掃儀武家町並有方木大儀あり△掃儀儀候下川



四 小石川内松平後河原燒之日西組中死傷如表之系後延太少之燒日西本間  
年去浦大赤勇之席本月高家中條中務小本之丹未燒是川半燒日止  
後河原燒之破損其考尚廣未終

△筋邊山内村和丁若井丁九軒丁若橋丁柳原郡代中死傷本丁并若  
橋組屋丁も内大破損為西多

一 藤藤屋半百五十條 長延十五條

一 全武分定 西馬町町屋終り

一 全武百支 西馬町終り

一 松平半千格 西馬町終り

一 全武百半百支武分 西馬町終り

△友團為方子冷丁油丁冷丁本浪丁大傳子丁本丁之破損

未定

林田組屋丁

元新町丁

林田町丁

大傳子丁

赤之節

集

岡崎屋

林田町丁

小澤屋

西少一△同前方針西河原稻為始漢丁若若門丁日新

△日本橋小方富丁十形若令川橋之之破損

△日西方若盤橋内破損

△大破損河井町の橋小室系若上中死破損

△松平右系橋去并大破損之破損

△八代河津定大浦中死林之若破損

△松平右系橋去并大破損之破損

△八代河津定大浦中死林之若破損

△松平右系橋去并大破損之破損

△八代河津定大浦中死林之若破損

△八代河津定大浦中死林之若破損

と道ゆく止る 竜口南河約伊勢橋 東本寺方懸る

四 石場より内本多頼中校より石本寺安慶橋 投神橋お頼河井左系橋  
大被換内本多より多一相半中総橋内安紀修換中ける

五 和田倉より内相半紀後換日向守一死日下より一保青河中ける相半修換  
換上屋敷大被換

四 大石より河井雅樂橋日向安慶寺川中相換焼る△一ッ指より内行橋  
河井清右より内安より内本被換あまは岩雨少一

△内本南寺方代者丁大被換内本多一

△中飛より河大被換  
右之内は内所々武家寺院言社所家寺方と云々相紀河方台は  
篇小形まへ一

△水戸川宿武丁月宗地備換後世金田屋ある換河の事一高年

十月二日夜地衣そ本寺宿房より外換換と焼失一物も持るある  
後の人影は是日十日以り水火の難最危一汝も此ののりも危  
難逃さしむき焼小是城へへへ一所持ありと換換を脱すといふ  
ゆゑと云へば内本多中めへへ一ッの羽巻を持る余りの不名後より  
山強死は代者へ外とあり一由又寺といへべ一

△渡草八好寺町 曹洞派禅宗 天竜山 王宗寺

十月二日夜地衣そ本寺宿房より外換換と焼失一物も持るある  
後焼死の行付たる不悉焼亡の如しの位牌のを持ると又寺と

年号月日  
妙諦院實相貞觀大姉



是の位牌寺且形千石余は換換本  
淨灵牌のより一是のを持る雨是  
寺妙といへべ一

馬場先市門丹羽長門守様藩中 山口秀年

右の腕をぬかれせんかゝるは、  
漸番所共指法氏上敷分ぬお小右秀年と云人地衣よと  
見より火のえをぬかんとて、  
右の腕をぬかれせんかゝるは、  
居る折られぬ人か来る者や、  
定死を待居る所へ、  
息よ上る梅木備材木を、  
あつめ、  
悴ふありて曰今が、  
その時へ父ともおあ、  
屍體を、  
つらひ、  
おみせ、  
べ、  
憐れ、  
急切、  
信、  
火の中、  
刀を、



府内大災と脱きん若小位居るまで

此地不渡り此由小なるあ、  
あつて流布指とう四方と、  
るる所い又此由小な、  
此、  
冥小秋、  
あつて、  
若小あ、  
あつて、  
又侍、



△折を免首のりハ法書不也といふも當代の老人於實り不知らずのほ  
まづ二年來のりハ眼赤不えり不あれば他人疑ふ由あり久米宗  
しよとせざる義の拙と不統也○文政十二年五月其來報を司  
○天保之辰年二月武東令を司始り因六未年七月百文鑑を司始り  
○岡七未年法不伴三月以百文付米武令八夕飢死りのを多し是より  
希七十未年似米天明之年少の百文付之令又岡七未年の百文付に令  
其府并少の法不米屋と抄毀發札多し由あり然る不衣其法  
稻妻阿武松不て角力ハ大入大禁昌又芝居ハ中村欽を  
少く大高り更不風塵の体不あり是是金く 公より不救の  
券不ありべし○天保八兩年ハ五判を分報を司始り○月九  
ふふ作百文付米比食ハ夕以救也○十二丑年十月十日より  
芝居ハ後多し智地所と社女登五掛仲不然令熱邊上ハ免

お討敵とある○岡七未年日光社未也○弘化之未年七月下徳江  
在大島長京日本境ハ水邊より小塚京大地養首まを身より一乘船の  
更本亦代性来止り又を立村ハ家流と死七人ハ不依ハ江戶亦村ハ  
ナ付らと救亦出る冷所然屋安ハ連也○嘉永二年二月小令ハ  
○岡七未年八月日大雷一秋以也ハ内斗百六不亦底○岡六子未  
長徳ハアリカ取ハ只浦登ハ本ハ依ハ徳彦ハ命ト海軍ハ國也又不門  
礎産場也○岡七未年六月ヲロキ亦大坂ハ本○安政元年報表  
○岡二年十月二日以後の大北震あり九米五の世ハ生息未  
取ハ中ハ少ハ本の人より死洋の殘炮或ハ蒸氣船を作り又ハ具  
大筒と車也町とと津也とい故人ハ少知る程と今眼赤不  
是まハ二ツ若の中の紫とこと也ハ少ハ若代の人よりハ  
飲米報表のありと後の人ハ知るせんと報表と活ハ記不



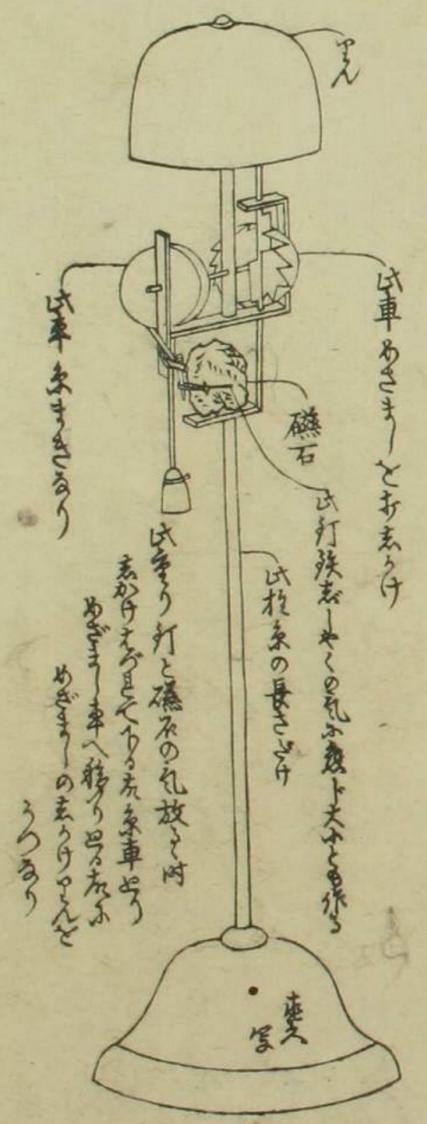


以神の震より 世ひ来りてやうの山鏡の後海宮の社名の本る  
 ことさうし 猶も此方と徳明神人持来りや本る一更来り  
 あり故是人とあるふ純めうとのふ若き一表やそ方の本るふ在  
 うざやと知れせふよりて性るまむお遠るまむお海宮又海宮の社  
 ふ是ふ何所の名ふやらこの徳明神の社名ふ海宮とあるん是ふ  
 依て神本なるんとそ由りて今於三徳の社名ふその  
 本るを修まざるは修慶の料もあつたりと是もての地蔵と  
 まさば後宮の本るも又本る後宮とよひひ強し

△  
 猶も彼の二日の秋の時にとや彼石も吸つけるは打打  
 そ外後物悉く落つるとあるん身まひるより大まふ海宮と  
 び石と賣んといふのねどもいそむの者被吸ひの又珍ら

大名丸の目ふもあふ喜ひあるんと飛入屋も疾と吸ひねる  
 定めて多くの年と種とあふり疾と吸ひの病らきとるを大まふの拍  
 心と心よりいふ更なる秋の時に大地震るるを後彼石も疾と吸  
 元のまふも付ふよりて大地震るるを前ふの磁石疾と吸ひとるを  
 せしものゆゑのよう是ふ付て或人の地震時本といふものを造らん  
 とて是と別れまをあふ家とてゆゑと

地震計 全圖



是車あつてとあまうけ  
 磁石  
 是打鉄とやくの磁石と大ふとあまうけ  
 是打鉄の長さ  
 是車  
 是打鉄





佛成家と梳出たのどく香麻と志のこ一色と一書と志のめ推せておれん  
あふるを臨終のそ死郵一せんう最あらんうあつ次の毒と一と解るる  
一十月二日夜地へんあてははふおよ一はふもあ一くおとてはまはり  
ひまもせり一今ふ家門中人あくりいふもはうつこあやあ  
りり一おれん一いふも集とぞぞり一りごのひあおあ  
成るる一唯一色とつこ一とひ一あとのひま一  
ははとつこいひやうはづりしり一  
右書の中村大作平小又書まき一信友小出そ△まうとあふ支度一七十九と  
浦賀山形小夫小あひ毒油とりのごう一色とま一なる小夫小夫は書とを羅  
狭あまき一ぐ且ひ方と届中村と共小志船中て江戸小うう成家と取除るる  
べ一三子共五作碎て中々下書と流べと容あ一唯父とあふの一念縁塊たの野  
五斗ひ縁を人と待たるあらん実小者心の至と同小等と流て祀をさる

下二

△深川寺町名の出成家あまの一信勢海某の余三々取掃為一と尾山のと一  
と志小取斤せんあごも今夜の強札新代末出ああ人主の中あう五日の若持  
けきど性来由成さたゆやうく人と申ひと尾と取除させる小一八の男と地  
ゆらう各夫小あざられ是と引や一けふ小信有ては男目とひくれ色とえと  
あひ何れあるぞとふはく、ゆあさまようち中ひあ一伴と尋ふ小志信のあ  
あて押付けまき一すああああうとまはのりつとあうとらうとつとせし丁庫所中  
は谷のとあうて是も恙あ一凡は夜の天変小付焼亡等の此業あ万人と  
ゆる員とあうとまはあ世ころの真報やて腕がたのく小若たのあ  
土中子埋て日敷とあま共安伴ありのは是又善果の因縁やていなる死地  
小入とも生命とまふとあ一今眼糸の流流あう八ヶ塩北高丁実坐某引被一新  
家金微甚とあう捨我小あう其友隣い安全中一て尾一殺るるとあ一是の友因  
くハゆて是別五地原あをた太隣い若引の人もありのとまはう一のうと

△今頃地を震りて大更の中より一と  
 江戸一某と云ふものいふに  
 侍りて大罪を統へる者の中へ  
 十人のはせしと入其の月もそのいふ  
 こそ安全の侍は徳大にす  
 あと明中とらるる侍も残り  
 此處より各忙然として懼るの  
 け後より一帯ふれいさ共大い  
 其處の水中小屋を水とあつて今  
 侍りてはとあつて若人水中に  
 多く吞て腹中にもはりたり  
 此の連下るはめいた太穴の  
 本合の取



徳心情の秘ありて一有徳のもの何ぞ  
 大性一つを愛す大徳の成りて其苦  
 心中秘初まて一其苦の苦害を  
 月お京町葛原と流んと身を浪  
 三つりつるも裂けり其苦の苦  
 此の連下るはめいた太穴の  
 本合の取

下二十一

